

貧困と自助

園長 児嶋 草次郎

7年8か月に渡って第2次安倍内閣を官房長官として支えて来られた菅義偉（よしひで）氏が、この9月に、第99代内閣総理大臣に就任されました。71歳です（昭和23年生まれ）。同じ団塊の世代（私は昭和24年生れ）として、光りであり希望となりました。もう残り少なくなって来た余生をどう生きようかと考え始めている「団塊の世代」の私たちにとっては、活を入れられた気分になります。まだまだ世のため人のためがんばらねばならないのだと。世界中がコロナ禍の中で生活面でも経済面でも危機的状況に置かれている時に、国のリーダーとして重大な責任を背負われるわけですが、お体大切にされ、がんばっていただきたいと思います。

今回の菅総理の誕生は、園の子供たちにとっても光り・希望につながると思書かせていただいています。子供たちの明倫塾や反省会の際にも、「このみんなの中から、将来総理大臣がでてよい。今回、菅総理の人生が、そのことが不可能ではないと示してくださった」と話したりしています。

雪深い秋田県の農家の長男として生まれ育っています（「政治家の覚悟」）。その頃は水道もまだなく、家の前の水路で朝起きたら顔を洗っていたそうです。中学校の同級生は120人くらいで、その半分が卒業すると東京に集団就職。残りの半分は農業などの稼業を継ぎ、高校へ進学できたのは30人くらいだったとか。高校進学率25%程度だということになります。

菅氏はよく覚えておられるのですが、私たち「団塊の世代」と呼ばれる、昭和23、24年頃生まれた世代は、まだ敗戦後間もない頃で、ほんとうに貧しい時代に育ちました。私が地元木城中学校卒業時、3年生が200人ちょっといた中で、高校に進学できた者は、半分もいなかったと思います。宮崎県からも、集団就職列車（当時は汽車）で続々と中卒の若者たちが都会へと送られていきました。私も10K先の高鍋駅まで友人を見送りに行ったことを鮮明に覚えています。菅氏の中学校が120人のうち30人しか高校進学できなかったということは、豪雪地帯である秋田は、宮崎よりもっと貧しかったということなのでしょう。ちなみに日本全国から夜行列車で都会に集まったこれらのまずしい若者たちが、その後の日本の高度経済成長を支え誘引したのです。その事を日本人は忘れてはいけません。

菅氏は高校卒業後、「すぐに農業を継ぐことに抵抗を感じ」（「政治家の覚悟」）、「家出同然で」上京。段ボール工場に住み込みで働き始めますが、「本当に厳しく」会社をやめて築地市場等でアルバイトをしながらお金を貯めたそうです。「一番思い出したくない青春時代です。」とも書いておられます。

そして、大学に行かないと自分の運命は変えられないと考え、勉強して、2年遅れで法政大学に進学。当時、私立大学の中では一番学費が安かったそうです。私は、地元の高鍋高校を卒業して、一浪して東京の明治学院大学に進学しました。法政大学を考えたこともありますが、私の志す社会福祉学科がありませんでした。あの頃はほんとうに学生運動が激しい頃で、ヘルメット姿の学生たちが角材を持って教室になだれこんで来たり、学長が広場でつるし上げに合

って、生卵を投げつけられたりする場面に出会ったり、学内は荒れて勉強する雰囲気ではありませんでした。私も看板屋のアルバイトに行ったことがあります。汗みどろになって、帰りにすすめられて入った共同プロがドロ水のようにあまりに汚く、即刻そのアルバイトを辞めたという苦い思い出もあります。

学費を自分で稼いだ菅氏に比べれば、私など、親に依存していたのですから甘いものでした。ちょうど同じ時期に、菅氏の奮闘する東京の町を、私もウロウロしていたのです。菅氏が自らと戦う苦学生だとするならば、私は軟弱なニヒリストでした。

菅氏は大学卒業後、いったん会社にはいますが、『この国を動かしているのは政治ではないか』との思いを持つようになり、政治家を志すようになります。26歳だったそうです。この辺が私たち凡人と歴史に名を残す偉人との違いです。ヘルメットをかぶって活動していた若者たちも、政治に不信感を持ち戦っていたのですが、「政治」というものを俯瞰（ふかん）できる若者は、ほとんどいなかったと思います。

国会議員の秘書となり、そこで地道に働いて力をつけ、38歳で横浜市議会議員に出馬。ブレジデント社の出した「第99代総理大臣菅義偉の人生相談」には、次のようなことが書かれてありました。

「政治家を目指した時点では『地盤・カバン・看板』のいずれもなく、文字通りゼロから出発しました。」

「まず名前と顔を覚えてもらおうと、数か月にわたり、一日200軒ものお宅に丁寧に挨拶回りをしました。」

「毎日、朝から晩まで歩き続けるのでいつも靴がボロボロで見かねた支援者の方に靴をプレゼントされたこともありました。」

菅氏はがむしゃらにがんばり、市議会議員に当選。そして、次に国政を目指し、47歳で国会議員に当選。世襲議員の多い中で、叩き上げ政治家とは菅氏のような方を言うのでしょうか。

「菅義偉の人生相談」の中で、経済アナリストの馬淵磨里氏は、「一般人でも総理になれることで国民を勇気づけ、日本の新しい時代の到来を感じさせます。」と書いておられ、この子供たちにも菅総理のことを話したくなったのです。

「私の事務所は『政界一、厳しい』ことでも有名らしく、笑い話になります」とも菅氏は述べておられます。「政治家の覚悟」の中で、「私にはそうしたスキャンダルはありません。三十八歳で市議員に初当選した時から三十年以上、政治家を続けていますが、ケジメは明確につけています。」とも書かれています。座右の銘は、「意志あれば道あり」だそうです。若い時代に空手をやっておられたそうですが、この強い意志力、ストイックな自律力はどこで養われたのでしょうか。

官房長官時代の規則正しい生活については、次のように説明されています。（「菅義偉の人生相談」）

「平日の夜は、複数の会合に参加した場合でも21時半ごろには宿舎に戻るようにし、（略）腹筋を100回こなし、どんなに遅くても24時前には就寝します。」

「朝は5時起床です。そしてやはり腹筋を100回。全国紙のすべてに目を通し、NHKニュースなどを確認したのち、6時半ごろ秘書官と警護官に迎えに来てもらい、その後に毎朝40分歩くのを日課にしています。7時半からは朝食ミーティングで経済界、学界、マスコミ、官僚など様々な分野の人から話を聞き、9時までに官邸に入るのが毎日のスケジュールです。」

もちろん総理になられてもこの生活リズムは変えられないのでしょうか。お酒も全然飲まれな

いということですから、まるで修行僧のような生活のように私には見えます。いちずにひたすら、子供時代から抱いていた「出稼ぎのない世の中をつくりたいという思い」、使命感が、菅総理を律して来ているのかもしれませんが。

10月26日、国会での所信表明演説を次のように結ばれました。

「私が目指す社会像は、『自助・共助・公助』そして『絆』です。自分でできることは、まず、自分でやってみる。そして、家族、地域で互いに助け合う。その上で、政府がセーフティネットでお守りする。そうした国民から信頼される政府を目指します。

そのため、行政の縦割り、既得権益、そして、あしき前例主義を打破し、規制改革を全力で進めます。『国民のために働く内閣』として改革を実現し、新しい時代を、つくり上げてまいります。」

私はこれらの菅総理の生活・政治姿勢を仰ぎ見ながら、二つのことをイメージしました。一つは「剛毅朴訥（ごうきぼくとつ）仁に近し」という論語の言葉。明治の西郷隆盛や石井十次にも見られる農耕民族である日本人（田舎人）の気概と誇り。欧米の価値観、都会の文明的誘惑に流されることもなく、常に秋田の自然を心に描きながら生きておられるように感じます。それが農家の長男としての責務（ミッション）であると感じておられるのかもれません。

マスコミの方々がもっとここらへんの精神風土について書かれるのかとも思っていました。あまり関心を示されないことを不思議に思っています。しかし考えてみれば、今日本を事実上支配している人たちは、もう高度経済成長以降に育った方々ばかりであり、“自助”の中で育った人間の感性には興味が湧かないのかもしれませんが。

二つ目のイメージです。話が少しずれていくのかもしれませんが、一枚の絵を思い出しました。そしてその絵を、今、私は自分の枕元に置いて、毎晩ながめています。ある方を通して、私はその絵を手に入れていたのです。和田英作の描いた「渡頭（ととう）の夕暮」です。

2016年、都城市美術館で開催された「日本近代洋画の巨匠和田英作展」で、大作「渡頭の夕暮」に出会った時は衝撃を受けました。そちらの絵は、畳1枚ほどの大きさ（122.7×190.5cm）で、明治30年、東京美術学校の卒業制作のために描かれたものです。和田の出世作だそうです。

川の渡し船を待っている、一農家の家族6人が描かれています。ほぼ中央に祖父と思われる頬（ほほ）かぶりした男性が、対岸をじっと見つめながら平クワを支えに立っています。父親と思われる男性は、竹かご二つに渡した天秤棒（てんびんぼう）に腰を下して、キセルでタバコを吸いながらくつろいでいます。こちらは対岸のことには関心がないようです。

乳飲み子を背負った母親は、祖父と同じ方向を見つめながら、凜と立っています。その母親に何かを訴えるように、左手をあげて対岸の方を指差しながら母親に向かい合っているのが、この家族の長男と思われる少年です。背中に大きな竹かごを背負っています。背丈から言えば、小学校5、6年生くらいです。もう一人、小学校低学年と思われる少年（弟）が、この5人から少し離れ祖父たちが見つめている方向を向いて腕を組んで立っています。後ろ向きで顔の表情はうかがえません。

夕暮れ時で、夕焼けが川面に映り、あたりは美しく輝いています。秋の風景かと思ったのですが、よく見ると、川向こうの畑には菜種と思われる黄色い花が帯状に広がっており、春の5月頃のようなようです。農業も忙しくなる時期です。

私が注目したのは、この母親と向き合う少年の表情です。時代は明治30年頃の一田舎です。日本人のほとんどは和服姿で生活していました。大人たちは草履（ぞうり）をはいていますが、

この少年は裸足です。一日中、離れた畑に行き親子で農作業をし、この日の仕事を終えて我が家に帰る途中の様子です。川を往復する渡し船を待っている間の、一時の家族の絆を和田英作は描いているのです。“自助”しかない時代、子供も貴重な労働力であり、家族総出で貧困と戦いました。それぞれに一日の疲労を抱えながら船を待っているのですが、祖父、父親、弟たちはそれぞれが寡黙(かもく)になって、勝手に自分の世界で息抜きをしているのに対し、長男のこの少年は、母親を気遣うような表情で母親に向き合っているのです。母親は一日中乳飲み子を背負いながら農作業をしたのでしょうか。相当疲れていると思いますが、まだ気は抜けません。家に帰れば、夕餉(ゆうげ)の支度が待っています。左手にヤカンを下げた後姿に緊張感も感じられますし、母親としての威厳さえかもし出しています。

この貧しい家族の中心にいるのは、この長男です。実際は、この肝っ魂母さんが家族をしつかりまとめているのに、この長男の少年が自分なりに目配り気配りしながら、母親を支えようとしているように私には見えるのです。その表情を夕日が照らし出し、すごく神聖な世界を作り出しています。

失礼な言い方かもしれませんが、この少年と菅総理の少年時代とがオーバーラップしてしまったのです。

明治と昭和では時代も違うし、こんなに明治時代のように貧しくはなかったかもしれませんが、私には、日本人の魂の原点ここにありという気持ちになって来ます。西郷隆盛の少年時代、石井十次の少年時代とも重なっていきます。

この絵を描いた和田英作とはどういう人であったのか。和田栄作展の時に買い求めた図録から拾い出してみます。明治7年、鹿児島県垂水市生まれ。明治12年(5歳)、牧師の父の親しくしていた一致長老教会の宣教師より小児洗礼を受ける。明治20年(13歳)、明治学院予科に入る。同学院の図画教師上杉熊松に洋画の初歩を学ぶ。明治24年(17歳)、明治学院を中退し、その後原田直次郎に学ぶ。明治27年(20歳)、黒田清輝等の道場に入門、外光派の画風を学ぶ。明治29年(22歳)、東京美術学校西洋画科開設に際して岡田三郎助、藤島武二とともに助教授に任ぜられる(教授は黒田清輝)。明治30年(23歳)、助教授を辞し同校西洋画科選科第4年級に入学、卒業制作「渡頭の夕暮」を書く。ここまでの人生です。

卒業後、明治33年(26歳)にフランスに留学。明治36年(29歳)帰国し、東京美術学校の教授に任ぜられる。私の祖父児島虎次郎は、明治35年に美術学校に入学しており、重なる期間もあります。どういう師弟関係があったのか今のところ不明です。その後、日本の絵画界の重鎮として活躍し、84歳で没。葬儀は明治学院講堂で行われたとのこと。

父親が牧師で幼児洗礼を受け、アメリカ人宣教師ヘボンが作った明治学院で学んでいますので、キリスト教的な価値観と視点は持っていたのですが、私は東洋的な仁(じん)の眼差しを観じてしまうのです。例えば、和田自身もヨーロッパ留学時代に模写しているミレーの「落穂拾い」を見ると、貧しい人々への共感を感じられても、その貧しい人々の人格にまで立ち入ろうとはしていません。貧しい人々はあくまでも風景の中にいる貧しい人であり、それ以上の存在ではありません。

ところが、この「渡頭の夕暮」の少年には未来を感じることができます。児島虎次郎が岡山孤児院に泊りこんで描いた「情の庭」からも同じような雰囲気を感じます。つまり、その絵は単なる風景画ではなく、その対象の人物の人格に迫ろうとするものであり、ただ共感するのではなく、自助の力によって貧困から抜け出していく力を信じようとしているように感じられま

す。人間としての尊厳の力と言うこともできるでしょう。江戸から明治にかけてもそうだろうし、昭和の敗戦からの復興もそうだろうと思うのですが、それら若者たちの尊厳の力のよって日本は回生することができたのだと思います。

ここからは特に子供たちに読んでほしい所です。明倫塾や反省会の時に、みんなの中から将来、総理大臣が出てよいと言いましたが冗談ではありません。今回菅総理が模範を示してくださいました。71歳で頂点に立つというのは、なかなか難しいことであり、別に総理ではなくてもよいのです。この町の町長でもよい、宮崎県の知事でもよい、国会議員でもよい。そういう政治の世界ではなく、実業の世界で世のため人のために活躍してもよい。

問題はどうしたらなれるかということです。菅総理の人生がそれを示してくださっています。農家出身でお金がないからと諦めていたら何も変わらない。グチを言っても前には進まない。菅総理はお金を自分で貯めて大学に行きました。政治家になると志しても、「地盤・カバン・看板」なく、ゼロからスタートしたと書いておられます。カバンというのはお金です。地盤・看板を作るために、毎日朝から晩まで靴がボロボロになるまで歩いて訴えたそうです。そして、支援者の方から靴をプレゼントされた。ここが重要です。

この友愛園は、国民の皆様から保護された空間です。しかし、それぞれの運命まで変えてもらえるわけではない。社会に出たら、自分の力で切り開いていかねばならない。その力をここにいる間に身につけておかねばならない。その力を発揮した時、回りにほんとうの支援者が現れるのです。この温室のような友愛園の生活がずっと続くわけではないのです。

その力とは何なのか。いつも言っていることです。まず生活習慣力。それから自律力（自己コントロール力）、プラス思考。そして、プライド・誇りです。ここに来た時には、劣等感や不信感の塊みたいになっていた者が、どうしたらプライド、誇りを持てるようになるのか。私は労作の力だと思います。「渡頭の夕暮」の少年のような気概（きがい）を持つことです。この友愛園の生活において、自分たちにできることを精一杯やっている（すべてを人に依存しているわけではない）そういう自助の気骨・意志とでも言ったような気持ちでしょう。

最後に、私が手に入れた「渡頭の夕暮」です。大きさは38×45cmほど。私はおそらく和田は最初にこの絵を描き、これをもとに大作に取りかかったのだらうと想像しています。本物だと信じているのです。大作は図録を見ると和田の母校東京芸術大学収蔵品になっているようですが、この小品は石井記念友愛社のしかるべき所に展示し、子供たちの魂を目覚めさせ奮い起こすものになりたいと願っています。